

鮎が扇形の新型魚道を上るその瞬間を撮ろうと毎日根尾川へ通い続け、2カ月が経過した。根尾川漁協の方から「ワシらより川へ来とるね」と声を掛けられるほど、我ながらよく続くと思っていた。平成7年4月30日の昼すぎ、魚道を見ながら握り飯を食べていた時、上り口で鮎が1匹跳ぶのが見えた。「おっ」と気付き、カメラを構えた。待つこと約1分。2匹目、3匹目と来たのに続いて、驚きの鮎の群が現れ、魚道を上り始めた！扇形の正面から上る鮎。段差部に突き当たり、魚



自然の河床から学んだ魚道(下)

山辰組 社長 馬淵和三

道左右の側面から上るを果たせた。鮎。それらが合流し、魚道表面の大小自然石を縫う流れの中を真っ黒に覆って上流へと移動する。これを逃してはいけないと、撮影しながらも目の前の光景に感動で鳥肌が立った。「やった、ありがとつ。大きく育てよ！」と私は思わず伊勢湾からはるばる遡上して来てこの魚道を上ってくれた鮎たちにお礼を言っていた。新型の「自然石パノラム魚道」は遡上を阻む壁の段差の課題を解決した。これにより、海と山をつなぐため、川を連続させるという大きな役割を果たせた。

この魚道、鮎はよく上ったが、川の流量が減ると魚道の水深が浅くなる。上空からも水中を移動する鮎が丸見えで多く、野鳥が捕食に飛来した。研究者の中には、野鳥も自然界の生き物、捕食も止む無しの意見もあったが、鮎の移動を助けるための魚道が野鳥の工場となるのは…。自然河川の流量の増減に影響されにくく野鳥が鮎を見つけ難い魚道を開発する課題が生じた。後にこれを解決する魚道を、国交省と共同で開発に携わ